

性役割観と夫婦関係満足度に関する質的研究

——妻の視点から——

狩 野 真 理

1. はじめに
 2. 本研究の目的
 3. 方法および手続き
 - 3-1 調査対象者
 - 3-2 調査方法
 - 3-3 倫理的配慮
 - 3-4 使用した変数
 4. 結 果
 - 4-1 被調査者の属性について
 - 4-2 分析の枠組みづくり
 - 4-3 夫を平等的だろうと推測している妻群のラベル
 - 4-4 夫を伝統的だろうと推測している妻群のラベル
 5. 考 察
 - 5-1 夫を平等的だろうと推測している妻群の特徴
 - 5-2 夫を伝統的だろうと推測している妻群の特徴
 6. 本研究の問題点と今後の課題
- 引用文献

1. はじめに

近年の結婚をめぐる社会的変化として、晩婚化、非婚化、少子化、熟年夫婦の離婚の増加などがしばしば指摘されており（中釜, 2008）、夫婦関係・家族についての実証的研究も蓄積されてきている。その中でも、夫婦それぞれが結婚や配偶者に対し、どれほど満足しているかについて、夫婦関係満足度や主観的幸福感、精神的健康度の比較などによって検討している研究も多くみられる（柏木・平木, 2009）。例えば、中年期夫婦の結婚・夫婦関係に対する満足度は、夫婦間にギャップがあり、妻の方が、不満が大きいことや（柏木・平山, 2003）、夫婦関係満足度は、主観的幸福感に影響を及ぼしていること（伊藤・相良・池田, 2006）、抑うつ度と夫婦関係満足度との間に有意な負の相関がみられたこと（堀口, 2004）、さらに、妻においては夫婦の

性役割観にずれがあることや、家事・育児分担に不満があることが夫婦関係満足度を低下させていたことなど（堀口，2002）数多く報告されている。

夫婦二人の新婚期から子育て期へと家族が発達するに伴い、夫婦それぞれの役割分業も、それぞれに変化、対応せざるを得なくなる状況となる。そして、多くの子どもがいる家庭においては未だ伝統的な性役割観が支持されているのが現状である（赤澤，2005；堀口，2004；相良・伊藤・池田，2008）。一方で、働く女性の増加は、「男は仕事、女は仕事も家庭も」となり、男性は不変で女性にのみ仕事が追加されたかたちとなっている。そして、そのことが男性と女性の間において、生活にも心理的にもずれを生じさせ、家族に新たな問題を生じさせていると柏木（2003）は述べている。このような中で、夫婦間における意識のずれに関心が高まってきており、その差異を扱った研究も増えてきている。例えば、母親側に満足度の低下が見られるにも関わらず、それを父親は認識していないことや（柏木・平山，2003）、夫婦間で性役割観のずれがある場合は、妻の満足度を低下させる傾向があることなど報告されている（堀口，2002）。また、その際のずれにも様々なかたちが予測され、その一つとして、妻が行っている役割分業が、夫の意向に沿ったかたちである場合などが挙げられる。夫から“家にいてほしい”というメッセージを感じ取った妻は、仕事をしたいと望んでいたとしても、夫の意向に沿って専業主婦をしている場合もあり、その際、必ずしも夫が伝統的な考えでなかったとしても、妻の中の心的現実、すなわち主観的な夫像がより強い影響力を持っていることが考えられる。そしてこのことが、妻の精神的健康や夫婦関係満足度に影響を及ぼしていることが指摘されている（無藤，2008）。

これらの点を検討するには、夫婦の自己認識に加え、互いに相手の性役割観についての推測を行い、それぞれが推測している夫婦間の差異についても検討する必要があると考える。“推測する”ということは、パートナーの言葉のみならず、口調、表情、行動といった言語的・非言語的メッセージを受け取り、それらを感じ取って解釈する。従って、夫婦間における相互作用を捉える視点の一つとして注目できるのではないかと考える。

2. 本研究の目的

性役割観、ならびに夫婦関係満足度に関する従来の研究は、主に妻のみ、あるいは妻・夫それぞれがどの様に考えているかという認識に焦点が当てられているものが多かった。しかし、夫から情緒的にケアされていると感じるほど、妻の家庭生活への肯定感が高いことや（平山，1999）、育児不安の減少には、母親が父親の協力をどの様に評価しているかという母親側の認知の方が重要であり（岩田，1995）、さらに、サポート研究においては、実行されたサポートより知覚されたサポートの方を重要視している（福岡・橋本，1995，1997；加藤・津田，1998；尾

身、2002)。従って、パートナーの性役割観についてどのように推測しているかという視点も重要であると考えられる。また、妻においては、夫婦の性役割観にズレがあること、家事・育児分担に不満があることが満足度を低下させていたように（堀口、2002）、それぞれの認識のみでなく、夫婦間の認識の差異も夫婦関係満足度に影響を及ぼす要因であることが考えられる。先にも述べたように、妻が伝統的な役割分業を行う背景には、パートナーである夫の性役割観も絡んでいる。この点を検討するには「パートナーがどのような性役割観をもっていると思うか」という、それぞれの推測と、その推測に至った根拠となる言動から、自己認識とパートナーとの差異について検討する必要があると考えられる。

そこで、本研究では、パートナーの認識を推測する際の手がかりとして日頃感じている言語的情報、並びに行動・態度・口調などの非言語的情報について自由記述欄に記載を求め、その記述を質的データとして用い、検討を行うことを目的とする。なお、量的な側面からの検討は、狩野（2013）にて報告している。

3. 方法および手続き

3-1 調査対象者

大阪府内の私立幼稚園・保育園に通う幼稚園児・保育園児の両親（449組）と、調査者の知人を介して幼稚園児・保育園児を持つ両親（21組）を対象に調査を行った。460部配布し、回収された調査票は131部で、全体の回収率は28.5%であった。このうち全ての変数に欠損値がなく、両親共にペアで揃っている110組のデータの中から、分析の際に分類が可能であった79組の自由記述を質的データとして使用した。

3-2 調査方法

全園児を通して調査票の配布をし、知人には郵送にて依頼した。それぞれが無記名にて回答後、夫婦間の回答の独立を保つため、回答後すぐに封のできる別々の封筒に入れ、2通1組にして添付の回収用封筒に入れて頂くようお願いした。

回収方法は、幼稚園・保育園の職員室前に設置したアンケート回収箱に入れるか、園児を通して回収した。知人を介して依頼した協力者については、知人がまとめて回収し、郵送にて返信を依頼した。調査期間は、平成22年6月18日～30日であった。

3-3 倫理的配慮

質問紙調査実施にあたって被調査者に対し、調査は無記名で行い、回答結果は統計処理をするため、個人が特定されることはなく、結果は学術的な目的以外に使用しないことを調査協力

依頼書に記載した。また、調査対象が両親であることから、一人親に対する配慮については、依頼した幼稚園・保育園の園長と主任と筆者で相談し決定した。

3-4 使用した変数

調査票は次の3部から構成された。

①性役割観尺度 ②夫婦関係満足度尺度 ③フェイスシート（父親と母親の年齢、子どもの年齢と未就園児の有無、母親についての職業の有無と就業形態、専業主婦の場合は就業の希望、現在の経済的な満足度、家族構成を問う項目からなる）

(1) 性役割観尺度

性役割観は、性別役割分業意識や性役割態度、性別分業観など様々な表現がなされている。しかし、いずれにおいても「男性は外で働き、女性は家庭を守る」といったそれぞれの性別にふさわしいと期待される分業意識を示しており（東・鈴木, 1991）、本研究においても「父親は外で働き、母親は家庭で家事・育児に専念すべき」といったそれぞれの性別にふさわしいと期待される分業意識である」と定義する。

性役割観を問う質問項目については、鈴木（1994）の平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）、柏木・蓮香（2000）、山本・神田（2003）などを参照して、多く用いられている質問8項目を選定した。質問項目は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」「女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である（逆転項目）」などの8項目に対して4件法で回答を求め、合計得点を性役割観得点とした。この得点が高いほど伝統的な考えを持っており、低いほど平等的な考えを持っていることを意味するよう得点化した。

また、同じ8項目の質問に対して「あなたのパートナーはどのように考えていると思いますか？」と妻に対しては夫の性役割観を、夫に対しては妻の性役割観の推測を求めた。その際も、各項目に対して4件法で回答を求め、得点が高いほど夫／妻の認識について「伝統的だろう」と推測しており、低いほど「平等的だろう」と推測していることを意味するよう得点化した。なお、尺度の内的整合性を示すクロンバックの α 係数は、自己認識では.77、パートナーの性役割観についての推測は.74であった。

続いて、「パートナーのお考えについて、どのようなところからそう思われましたか？パートナーの言葉、態度、表情、出来事など何でも結構です。お気づきになったことをご自由にお書き下さい」と自由記述で回答を求めた。

(2) 夫婦関係満足度尺度

夫婦間における関係性を表すことばに、夫婦関係満足度、結婚満足度、関係満足度、結婚の幸福度、結婚の質、夫婦関係の質、などの用語が用いられており、これら夫婦の関係性の質を表す概念や用語はこれまで曖昧に使われてきた(堀口, 2000)。本研究においては、「夫婦関係全般における主観的な満足度」として「夫婦関係満足度」を定義する。

夫婦関係満足度を測定する尺度を大別すると、Norton (1983) によって作成された Quality Marriage Index (GMQ) 6項目を諸井が日本語訳した尺度(諸井, 1996)など、数項目から諸側面を測定する尺度と、主観的に単一指標にて測定する尺度がある(赤澤, 2004, 2005; 池田・伊藤・相良, 2005; 柏木・平山, 2003; 相良他, 2008)。本研究においては、主観的な夫婦関係満足度に及ぼす影響を検討することが目的であり、同時に、パートナーの夫婦関係満足度に対しても推測を求めるため、単一指標が望ましいと考え、測定の精度を高める目的で10段階評価とした。具体的には、夫婦の関係について、パートナーとの満足度を“全く満足していない(0点)”から“大変満足している(10点)”の単一尺度で回答を求めた。同時に「あなたのパートナーはどのように考えていると思いますか?」と妻に対しては夫の夫婦関係満足度を、夫に対しては妻の夫婦関係満足度の推測を求めた。その際も同様に10点法で回答を求め、得点が高いほど、夫/妻の認識について「満足しているだろう」と推測しており、低いほど「満足していないだろう」と推測していることを意味するよう得点化した。続いて、「パートナーのお考えについて、どのようなところからそう思われましたか? パートナーの言葉、態度、表情、出来事など何でも結構です。お気づきになったことをご自由にお書き下さい」と、自由記述で回答を求めた。

(1) と (2) における自由記述を質的分析の対象とし、本研究にて検討することとした。

4. 結 果

4-1 被調査者の属性について

夫の平均年齢は36.0歳 (SD 6.1)、妻は35.0歳 (SD 5.7) であった。各家庭における子どもの平均数は1.9人 (SD 0.81) であった。妻の職業は、専業主婦が71.8%、続いてパートタイム就労が13.6%、常勤(育休・産休を含む)が9.1%、在宅仕事で1.8%、自営業が0.9%であった。家族構成は父母と子どものみの核家族が93.6%、夫の親と同居が4.5%、妻の親と同居が1.5%であった。これらの属性から、本調査対象者の全体像は、30歳代の夫婦で母親が専業主婦、子どもが1~2人の核家族と解釈できた。

4-2 分析の枠組みづくり

本研究では、自由記述欄に記載されている内容を質的データとして検討することとした。

質的データを扱うにあたって、妻群・夫群という大きな枠組みでの検討ではなく、夫婦ペアでの分析を重要視したため、次の2ステップで分類を行った。まず、性役割観による夫婦の組み合わせを行い、その上で、夫婦（a妻・b夫）それぞれの夫婦関係満足度得点により、満足度高群・低群とし、満足度によるペア分類を行った。そして、それぞれの分類における自由記述の内容をKJ法に準じて分類することとした。

具体的には、まず、性役割観による夫婦の組み合わせによって4群に分類した。その際の組み合わせであるが、2通りの考えがある。1つは、実際に測定された妻と夫自身の認識での組み合わせである。もう1つは、妻自身の認識と夫に対する推測との組み合わせであり、それは、いわゆる妻の自己内での夫像である。当該の研究において、どちらの組み合わせを選択するかについては、次のように考えた。

先行研究において、妻が夫の認識をどのように推測しているかということが、夫婦関係満足度に影響があると考えられており（岩田，1995；平山，1999）、その際、妻は、“私はこう考えているけれど、夫はこう考えているだろう”といったように、自分の認識との比較や差異として考えていると思われる。また、実証的な研究においては、夫婦関係満足度を規定する家事・育児分担やコミュニケーションといった要因が、妻側には影響がみられるものの、夫側においては、影響を及ぼしていないことが示されており（堀口，2002；平山・柏木，2004；平山，2002；平山・田矢・柏木，2003；伊藤・相良・池田，2007）、狩野（2013）においても、妻・夫の満足度は、実際の差異ではなく、推測した差異、すなわち自己内の差異において有意な相関関係がみられたためである。さらに、大野（2008）や赤澤（2005）からは、夫群においては、家庭内の要因よりも、仕事という社会における要因が夫婦関係満足度と関連していることが報告されている。これらのことから、群分けの際には「実際の夫の自己認識」との組み合わせで検討せず、妻側の視点を重視し、「妻が推測した夫の認識（妻⇒夫）」との組み合わせで検討を行うこととした。妻の性役割観得点の平均値は20.80（SD3.93）であったため、19点以下を「平等的」、20点以上を「伝統的」とした。妻が推測した夫（妻⇒夫）の性役割観得点の平均値は22.55（SD3.84）であったため、21点以下を「平等的だろう」、22点以上を「伝統的だろう」とした。

次に、夫婦関係満足度の高低（①満足度が高い＝満足している ②満足度が低い＝不満を感じている）と、夫婦のいずれか（a妻・b夫）によって分類を行ったところ4タイプに分類された。その際、満足度の高低の分類においては、質問紙で得られた数値と自由記述に書かれている内容とを総合して判断を行った。夫婦関係満足度得点は、妻群の平均値が6.85（SD2.30）であっ

たため、7を基準にし、夫群は平均値8.00 (SD1.94)であったため、8を基準とした。なお、筆者を含めた2人の評定者が独立して分類を行い、評定者間の一致度(タイプの分類が一致したペア÷全ペア)が0.85と高かったため、以後は筆者1人が分類を行った。

夫婦共に満足度が高いペアを「①互いに満足ペア」、夫婦共に満足度が低いペアを「②互いに不満ペア」、妻のみ満足度が低いペアを「③妻のみ不満ペア」、夫のみ満足度が低いペアを「④夫のみ不満ペア」、いずれにも分類が困難であったペアを「⑤不明(31ペア)」として分類した。なお、明らかな「④夫のみ不満ペア」は分類できなかった。

以上のように分類を行った上で、自由記述の質的データを用いてKJ法を参考に分析を行った。まず、文脈を考慮し、カードを作成した。類似したカードをまとめて、小グループができたところでラベルをつけた。その際、妻の回答か夫の回答かが判別できるようにした。分類によっては、該当ペア数が少ない群、自由記述の記載が少ない群、妻のみの回答しなかった群もある。

全体のラベルを概観してみると、夫を平等的だろうと推測している妻群(共に平等だろう群と伝統・平等だろう群)と、夫を伝統的だろうと推測している妻群(平等・伝統だろう群と共に伝統だろう群)は、それぞれにおいてラベルが類似していることが見て取れた。そこで、平等的だろう群、伝統的だろう群の①互いに満足ペア、②互いに不満ペア、③妻のみ不満ペアのラベルを提示し、それぞれにどのような特徴が見られるかを検討する。

4-3 夫を平等的だろうと推測している妻群におけるラベル

夫を平等的だろうと推測している妻群の、①互いに満足ペア、②互いに不満ペア、③妻のみ不満ペアのラベルをTable 1に示す。

Table 1 夫を平等的だろうと推測している妻群のラベル①②③

	夫を平等的だろうと推測している妻群	
	(1) 妻も平等的（共に平等だろう群） 17ペア	(3) 妻は伝統的（伝統・平等だろう群） 7ペア
① 互いに満足ペア	【自分が希望】	【自分が希望】
	【仕事をすることのメリット】	【子育ても重要】
	【夫は協力的】	
	『パートナーへの感謝』	『パートナーへの感謝』
	『互いにパートナーからのねぎらい・感謝を感じる』	『互いにパートナーからのねぎらい・感謝を感じる』
	【夫からの理解を感じる】	【夫からの理解を感じる】
	＜妻も大変＞	＜妻も大変＞
	『話し合っている』	『話し合っている』
	【職場の環境が良い】	
	【サポート体制がある】	
② 互いに不満ペア	(1) 妻も平等的（共に平等だろう群） 1ペア	(3) 妻は伝統的（伝統・平等だろう群） 2ペア
		【夫の不満気な態度】
		【自分に余裕がない】
	【あきらめ】	
③ 妻のみ不満ペア	(1) 妻も平等的（共に平等だろう群） 4ペア	(3) 妻は伝統的（伝統・平等だろう群） 2ペア
	【負担が多い】	
	【仕事への援助がない】	【働かなければならない】
		【夫の非協力】
	【夫の不満な態度】	
	【理解して欲しい】	

【 】を妻の回答ラベル、〈 〉を夫の回答ラベル、『 』を共通の回答ラベル

4－4 夫を伝統的だろうと推測している妻群のラベル

夫を伝統的だろうと推測している妻群の、①互いに満足ペア、②互いに不満ペア、③妻のみ不満ペアのラベルを Table 2 に示す。

Table 2 夫を伝統的だろうと推測している妻群のラベル①②③

夫を伝統的だろうと推測している妻群		
① 互いに満足ペア	(2) 妻は平等的 (平等・伝統だろう群) 6ペア	(4) 妻も伝統的 (共に伝統だろう群) 20ペア
	【仕事したいが・・・今も充実】	【自分が希望】
		【満足】
	【仕事したいが・・・やむをえない】	【納得】
		《理想どおり》
		《よきパートナー》
		【夫は協力的】
	《妻への感謝》	【夫への感謝】
		『お互いに感謝』
	【夫からの不満の訴え】	『お互いに歩み寄る』
	【夫からの感謝を感じる】	【夫からの愛情・感謝を感じる】
		【気遣いを感じる】
	《妻に任せきり》	《妻に負担をかけてる》
	《手伝いたいが・・・》	《手伝いたいが・・・》
	【仕事を反対された】	【働く人を尊敬】
	【会話をしている】	『話し合い』
② 互いに不満ペア	《お互いに確認》	
	【夫の母親が専業主婦】	【夫の母親が専業主婦】
	《伝統的な考え》	《伝統的な考え》
		『社会への不満』
	(2) 妻は平等的 (平等・伝統だろう群) 3ペア	(4) 妻も伝統的 (共に伝統だろう群) 5ペア
	『パートナーからの文句』	《妻からの文句》
	『パートナーからの要望』	
	【夫の不満気な態度】	『パートナーの不満気な態度』
	【夫の伝統的な考え】	【夫の伝統的な考え】
		【夫の理解がない】
③ 妻のみ不満ペア	【夫の母が専業主婦】	《協力している》
	【両立は時間がない】	【働かなければならない】
	【働きにくい世の中】	【経済的に働きたいが育児もしたい】
		【妥協】
		《仕方ない》
	(2) 妻は平等的 (平等・伝統だろう群) 6ペア	(4) 妻も伝統的 (共に伝統だろう群) 6ペア
	【両立が難しい】	【ストレス】
	【働きたいが、仕事への援助がない】	【家にいたいが働かざるを得ない】
	【夫の非協力】	【夫の非協力】
	『夫の伝統的な考え』	【夫の伝統的な考え】
	【夫からの文句】	【夫からの文句】
	【反論】	
	【夫に対する不満】	《妻の不満気な態度》
	【夫の母親が専業主婦】	【夫の母親が専業主婦】
	《よく話し合っている》	《いいパートナー》
	《妻の様子》	《妻は疲れている》

5. 考 察

本研究では、パートナーの認識を推測する際の手がかりとして日頃感じている言語的情報、並びに行動・態度・口調などの非言語的情報について自由記述欄に記載を求め、その記述を質的データとして扱い、検討を試みた。以下、【 】を妻の回答ラベル、〔 〕を妻の回答例、〈 〉を夫の回答ラベル、< >を夫の回答例、「 」を夫婦共通の回答ラベルとし、それぞれについてどのような特徴がみられるかを検討する。

5-1 夫を平等的だろうと推測している妻群の特徴

「夫を平等的だろうと推測している妻群」の「①互いに満足ペア」において、特徴的なことは次の3点である。

第一に、「共に平等だろう群」も「伝統・平等だろう群」も、妻は【自分が希望】して働くが専業主婦かを選択している点である。また、【仕事をすることのメリット】や【子育ても重要】といった、それぞれが大切に考えていることも述べられており、今の自分の立ち位置に納得していることが推察される。

第二に、両群とも夫も妻も【互いに感謝の気持ちを言葉で表す】など『パートナーへの感謝』を伝えていると同時に、〔私をねぎらってくれる〕、<家内も認めてくれていると感じる>など『互いにパートナーからのねぎらい・感謝』を感じ取っており、特に「共に平等だろう群」の妻からは【夫は協力的】である記述が多く見られた。また、妻においては、〔私のやりたいことを応援してくれる〕、〔夫は私が働きたいのを知っているので理解してくれている〕など【夫からの理解を感じる】ことが重要であることが窺われる。佐藤（1986）は、「“わかって貰えた”と感じるのは、メッセージの“内容のレベル”と“関係のレベル”で表される情緒的つながりへの要望が共に受け止められたときである」と述べているように、“わかって貰えている”という感覚を日常的に感じるということが重要であると考えられる。野末（2008）もまた、子育てをめぐる夫婦のあり方について「最も重要なことは、夫婦がお互いの子育ての分担について納得しているかどうか、お互いに支えあっていると実感しているかどうかということである」と述べているように、互いの役割を納得して受け入れ、協力し合っているという意識が夫婦関係満足度に良い影響を及ぼしていると考えられる。

第三に、【いつも話し合って決める〕、<お互い話し合い、歩み寄って決める>などの記述から、日頃から夫婦で『話し合っている』様子が窺われる。中釜（2005）は、中年期夫婦の関係の悪さを引き起こす要因のひとつとして、「長い子育て期を夫は仕事、妻は家庭の切り盛りという性別役割分業体制で乗り切った副産物として生まれた夫婦の交流の欠如の問題」を挙げて

いるように、物事を話し合って決めるということは夫婦の交流が盛んである様子が窺われ、互いの役割はそれぞれの家庭で異なっている、そこでの夫婦の交流が重要であると考え。また、夫が夫婦間の問題を回避している場合、3年後の夫婦満足度が下がり、夫が問題を積極的に話す場合、3年後の夫婦満足度は上がっていたという Gottman, J. M. & Krokoff, L. J. (1989) の研究結果が示すように、問題等も共に話し合える関係性が大切であると考え。

「共に平等だろう群」17ペアのうち10ペアが有職の妻であった。妻の回答からは、【職場の環境がよい】、【サポート体制がある】といった仕事を続けるにあたり、環境面の充実が必要である様子が窺われる。同時に、夫からの協力を感じることも重要であり、また、【夫は私が働きたいのを知っているので、理解してくれている】や【やっぱり家がいいと言ってくれる】など、それぞれが大切にしている私、すなわち“働く私／専業主婦の私”を理解してくれることが、妻の満足度に影響を及ぼしていると推察される。同時に、夫自身も妻に感謝し、妻からの感謝を感じ取るということが、夫自身の満足度に影響を及ぼしていると推察される。この結果は、柏木・平山 (2003) が、夫・妻ともに“相思相愛”が現実に行われていることが夫婦関係満足度にとって極めて重要であるという知見と一致すると考える。また、夫の回答からは、《社会への提言》や、《社会に対する不満》といった家庭外に及ぶ記述もあり、社会へ対する関心の高さが窺われた。

次に「夫を平等的だろうと推測している妻群」の「②互いに不満ペア③妻のみ不満ペア」は該当ペアも少ない上、夫の自由記述がみられなかった為、妻の記述のみからの検討となる。

「③妻のみ不満ペア」の「共に平等だろう群」においては、【子どもの体調で仕事が休めない】ように実際に【仕事への援助がない】ため大変であること。さらに、妻は【夫の不満気な態度】を認知しており、【もう少しわかって…】といった【理解して欲しい】気持ちも記述されている。

「③妻のみ不満ペアの伝統・平等だろう群」においては、【3歳までは家庭でみてあげたかったが仕方ない】など【働かなければならない】状況であるにもかかわらず、【「フルタイムで働いたら」と言うが、全然手伝ってくれない】といった夫の協力が不在の状態であることが窺われる。同じように夫を平等的だろうと推測しているが、「①互いに満足ペア」との違いは、この実際の協力が感じられているか否かにあるのではないだろうか。会話等において夫の平等主義的な発言があり、夫を平等的だろうと推測していたとしても、それが行動として感じられない場合、妻側の不満につながるのではないかと考えられる。

5-2 夫を伝統的だろうと推測している妻群の特徴

「夫を伝統的だろうと推測している妻群」の「①互いに満足ペア」は、妻自身の性役割観の違いがあっても類似する点と、わずかに異なる様相を示している点がみられた。まず、類似点としては、【夫の母親が専業主婦】という妻の記述と対応するように＜子どもが小さいうちは母親が傍にいた環境が大切＞といった夫自身の《伝統的な考え》が記述されている点である。

わずかに異なる点としては、第一に「共に伝統だろう群」において、妻は【自分が希望】、【満足】、【納得】しており、夫も《理想どおり》、《よきパートナー》のように、互いの役割を積極的に受け入れ、満足している様子が窺われた。一方、「平等・伝統だろう群」において妻は【仕事もしたいが、子どもが小さいうちは育児に専念したい】、【仕事もしたいが今の生活も充実している】といった【仕事もしたいが…今も充実】、【仕事もしたいが…やむを得ない】といったように、積極的に自ら希望しているというわけではないが今の状況を受け入れたり、納得したりしている状況が推察される点である。

第二に、「共に伝統だろう群」においては、夫婦双方から『お互いに感謝』、『お互いに歩み寄り』という記述がみられる。しかし、「平等・伝統だろう群」においては、夫の回答からは《妻への感謝》が述べられており、妻も【夫からの感謝】を感じているなど、夫の気持ちは伝わっているものの、妻側からのストレートな感謝の気持ちが記述されておらず、【仕事を反対された】記述や、【夫からの不満の訴え】も同様に感じている点である。また、夫からはくもって家事・育児に参加したいが仕事が…>のように《手伝いたい…》時間が足りない様子やく仕事で忙しく妻に任せっきりになっている>など妻を心配する記述がみられるものの、妻側から夫に対するねぎらい・感謝の気持ちなどの記述はみられていない。このように、「平等・伝統だろう群」の妻は、複雑な思いも感じている事が推察される。

次に「夫を伝統的だろうと推測している妻群」の「②互いに不満ペア」の特徴としては、まず、【夫から「自分に対し優しくなくなった」と言われたことがある】、＜日頃から文句を言われる＞といった『パートナーからの文句】、【夫から「感謝の気持ちを言葉に出してほしい」と言われる】＜「手伝いをしてほしい」と言われる＞といった『パートナーからの要望】、『パートナーの不満気な態度』のように、双方から同じような記述がみられている点である。ここに、対称的なコミュニケーションパターンが形成されていることが推察される。

「平等・伝統だろう群」の「③妻のみ不満ペア」は、他にはみられない大きな特徴がみられた。それは、妻の【反論】、【夫に対する不満】、【夫からの文句】がストレートに記述されている点である。例えば【夫はパートに出ることを認めていない】、【女は勉強がなくても家庭が守れたらいいという。私はそうは思わない!】、【夫は聞く気がない】、【家のことが出来ていな

い」と言われる〕など、自由記述欄いっぱいに書かれており、妻の切なる訴えが強く感じられた。夫の回答が少ないため、過大解釈はできないが、夫のみに《よく話し合っている》という記述がみられ、そこには“話し合っているつमोरの夫と文句を言われていると感じている妻”という夫婦間の齟齬が生じていることが推察される。佐藤（1995）は、「日本の夫婦の会話には、夫にアナログコミュニケーション（気持ちのレベルでの情緒的かわり）を求める妻が、デジタルコミュニケーション（事柄レベルで説明的関わり）ばかりの夫に愛想を尽かしているという構図が見られる」と述べているように、夫としては、よりよくなるためにと思い、妻のためには何らかのアドバイスをしているのかもしれない。しかし、妻側はアドバイスを聞きたいのではなく、まずは気持ちをわかってほしいと思っている様子が推察される。

もう一点の特徴として、〔もし働けても負担が増えるのを覚悟しなければならない〕といった【両立が難しい】こと、〔仕事をしたいが保育園がない〕、〔子どもが病気の時職場や家族の協力がないと難しい〕といった【働きたいが、仕事への援助がない】ことや、〔夫から家にいて欲しいといわれた〕といった『夫の伝統的な考え』など、仕事をしたいと思っているが、実現が難しい要因が挙げられている点である。就労継続・退職の理由には、「夫や夫の親からの就労反対」が顕著な影響を及ぼしているように（小坂・柏木、2007）、夫や夫の実家の考え方も大いに影響を及ぼしていると考えられる。また、〔夫は家事を一切しない〕、〔自分の父は……という理由で分担に非協力〕といった【夫の非協力】も同様に、仕事をしたいと考えている妻にとっては、不満を募らせる要因にもなり、有職群の妻にとってはまさに多重役割となっていると推察される。また、専業主婦の場合では、夫の意向に沿って、あるいは、サポート体制が十分でないことから専業主婦を続けている現状に不満や葛藤を感じていることが推察される。しかし、「平等・伝統だろろ群」においても、「互いに満足ペア」は存在する。その点に関しては、妻が納得しているか否かがポイントであると考えられる。現状を【仕事もしたいが・・今も充実】していると楽しんでいるか、【働きたいが、仕事への援助がない】ことや、『夫の伝統的な考え』によって葛藤を抱えているかによって妻の満足度は異なると考えられる。また、逆に「共に伝統だろろ群」において、【家にいたい働かざるを得ない】状況で働いている場合には、“自分の意向に反して、働かなくてはならない。しかし、夫の協力は期待できない”といった多重役割を担っていると推察される。もともと伝統的な考えを持っている妻は、家事・育児は自分の役割であると一人でこなそうと努力し、その上仕事も…という状況になっているのではないだろうか。夫は、《妻は疲れている》といった妻の様子を気遣うような回答があるにもかかわらず、妻に対して伝わっていない様子が窺われる。家族内ケア行動を検討した平山（1999）は、育児を担う女性自身もまた誰かによってケアされる必要があり、「ケアの主たる担い手である妻を『ケアする』ことの重要性が強調されるべきである」と述べており、また情緒

的サポートが母親の育児ストレスを軽減させることを報告しているように（冬木，2000；加藤・津田，1998；中西，1998；尾形・宮下，1999；末盛，1999）、道具的なサポートができなかったとしても、情緒的なサポートが伝わることであれば、妻の満足度にも影響を及ぼし、さらにそれが夫の満足度にも影響を及ぼすのではないだろうか。

また、②互いに不満ペアと③妻のみ不満ペアを「不満ペア」として捉えると、夫は《協力している》、《よく話し合っている》という認識であるにもかかわらず、妻は、【夫の理解がない】、【夫の非協力】、【夫からの文句】といった認識であった。夫からの回答では妻に対するねぎらいも記述されているものの、それが妻に伝わっておらず、“協力しているつもりの方と協力してもらっていないと感じている妻”といった夫婦間の齟齬が生じていることが推察された。

性役割観と夫婦関係満足度の関係から、以上をまとめると次のようなことがいえよう。

互いに満足しているペアの特徴は、“お互いがパートナーに感謝・ねぎらいといった気持ちを伝え、パートナーからも同様の気持ちを感じられていること”であった。そして、互いに不満ペア・妻のみ不満ペアを「不満ペア」として捉えると、“話し合っているつもりの方と文句を言われていると感じている妻”、“協力しているつもりの方と協力してもらっていないと感じている妻”という夫婦間の齟齬が生じていることが示唆された。

また、妻の就業形態が自分の意向と異なっており、それに納得できていない場合、さらに“夫からの理解・協力が期待できない”と感じている場合に、妻の満足度が低下すると考えられ、逆に、妻が今の自分の立ち位置に納得し、夫からの理解を感じられることが妻の夫婦関係満足度に良い影響を与えることが示唆された。

6. 本研究の問題点と今後の課題

最後に本研究の限界と今後の課題について述べる。

1点目は、被調査者数が少なく、研究知見の一般化には限界がある点である。夫婦ペアで提出が可能であるということは、それ自体で夫婦の関係も概ね良好であることが推測される。また、本テーマに対しての関心が高い人が多いことも考えられるなどのデータに偏りが予想される点である。

2点目は、自由記述という一側面を切り取ったものを質的データとして扱ったことや妻と夫から同量のデータが得られておらず、妻側のデータに比重をおいているという限界である。今後は、ペアデータ数を増やすとともに、夫婦ペアでのインタビュー調査などによって、より詳細な検討をする必要がある。

本論文は、神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科に提出した修士論文（2010年度）の一部を加筆修正したものです。調査にご協力いただきました幼稚園の園長先生ならびに先生方、そして保護者の皆様に心から感謝申し上げます。また、ご助言とご指導を賜りました東豊先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 赤澤淳子（2004）．夫婦における性別役割分業への貢献度と関係満足度に影響する要因の検討 家政学研究, 51, 6—15.
- 赤澤淳子（2005）．夫婦の関係満足度および生活充実感における規定因の検討 社会心理学研究, 21, 147—159.
- 福岡欣治・橋本幸（1995）．知覚されたソーシャル・サポートのストレス緩和効果におけるサポート源とサポート内容の影響：看護教員養成講習会の受講者を対象として 日本健康心理学会編集, 8, 1—11.
- 福岡欣治・橋本幸（1997）．大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403—409.
- 冬木春子（2000）．乳幼児をもつ母親の育児ストレスとその関連要因—母親の属性およびソーシャルサポート 現代の社会病理, 15, 39—56.
- Gottman, J. M. & Krokoff, L. J. (1989). Marital interaction and marital satisfaction: A longitudinal view. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 57, 47—52.
- 平山順子（1999）．家族を「ケア」ということ—育児期の女性の感情・意識を中心に— 家族心理学研究, 13, 29—47.
- 平山順子（2002）．中年期夫婦の情緒的関係—妻から見た情緒的ケアの夫婦間対称性 家族心理学研究, 16, 81—94.
- 平山順子・田矢幸江・柏木恵子（2003）．育児期夫婦の配偶者満足度を規定する要因—妻の就労形態別の検討— 発達研究, 17, 69—85.
- 平山順子・柏木恵子（2004）．中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連 発達心理学研究, 15, 89—100.
- 堀口美智子（2000）．「親への移行期」における夫婦関係—妊娠期夫婦と出産後夫婦の夫婦関係満足度の比較を中心に— 生活社会科学研究, 7, 81—95.
- 堀口美智子（2002）．第1子誕生前後における夫婦関係満足度—妻と夫の差異に注目して— 家族関係学, 21, 139—151.
- 堀口美智子（2004）．夫婦の家庭内役割分担における妻の葛藤と対処プロセス—乳児をもつ妻へのインタビューからの考察— 家族関係学, 23, 81—90.
- 池田政子・伊藤裕子・相良順子（2005）．夫婦関係満足度に見るジェンダー差の分析—関係は、なぜ維持されるか— 家族心理学研究, 19, 116—127.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子（2006）．職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討 発達心理学研究, 17, 62—72.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子（2007）．夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響—自己開示を中心に— 文京学院大学人間学部研究紀要, 9 (1), 1—15.
- 岩田美香（1995）．育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク 北海道大学教育学部紀要, 68, 191—233.

- 狩野真理 (2013). 性役割観と夫婦関係満足度との関連 龍谷大学臨床心理学会紀要, 1, 33-53.
- 柏木恵子・蓮香園 (2000). 母子分離<保育園に子どもを預ける>についての母親の感情・認知一分離経験および職業有無との関連で— 家族心理学研究, 14, 61-74.
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性—妻はなぜ不満か— 心理学研究, 74, 122-130.
- 柏木恵子 (2003). 家族心理学 社内変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会
- 柏木恵子・平木典子 (2009). 家族の心はいま—研究と臨床の対話から 東京大学出版会
- 加藤道代・津田千鶴 (1998). 宮城県大和町における0歳児を持つ母親の育児ストレスに関わる要因の検討 小児保健研究, 57, 433-440.
- 小坂千秋・柏木恵子 (2007). 育児期女性の就労継続・退職を規定する要因 発達心理学研究, 18, 45-54.
- 諸井克英 (1996). 夫婦関係満足度尺度 堀洋道 (監修) 吉田富二雄 (編) (2001). 心理測定尺度集II 一人間と社会のつながりを考える (対人関係, 価値観) サイエンス社 p149-152.
- 中釜洋子・野木武義・布柴靖枝・無藤清子 (著) (2008). 家族心理学—家族システムの発達と臨床的援助 有斐閣ブックス
- 中西雪夫 (1998). 乳幼児をもつ母親の育児不安：父親に関する諸要因の影響 家族関係学, 17, 1-12.
- 尾形和男・宮下一博 (1999). 父親との協力的関わりと母親のストレス, 子どもの社会性発達及び父親の成長 家族心理学研究, 13, 87-102.
- 尾身康博 (2002). ソーシャル・サポートの提供者と受領者の間の知覚の一致に関する研究—受領者が中学生で提供者が母親の場合— 教育心理学研究, 50, 73-80.
- 相良順子・伊藤裕子・池田政子 (2008). 夫婦の結婚満足度と家事・育児分担における理想と現実のずれ 家族心理学研究, 22 (2), 119-128.
- 佐藤悦子 (著) (1986). 家族間コミュニケーション 勁草出版
- 佐藤悦子 (著) (1995). 夫婦療法 二者関係の心理と病理 金鋼出版
- 末盛慶 (1999). 夫の家事遂行及び情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感—妻の性別役割分業意識による相互作用 家族社会学研究, 11, 71-82.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- 山本理絵・神田直子 (2003). 子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方 (II) —「育児不安」と性別役割分業意識の関連を中心に— 児童教育学科論集, 36, 39-54.